

戦火に散ったマスコット ⑦

'39年夏、全試合完封で優勝

準決勝・決勝は2試合連続ノーヒットノーラン

和歌山・海草中学 嶋清一



1939年夏の甲子園で優勝し、学校での記念撮影



和歌山市の偉人5人に選ばれた嶋清一

南シナ海に消えた “甲子園史上最高の投手”

甲子園初優勝を成し遂げている。写真の1枚は、閉会式直後のもの。もう1枚は、和歌山の学校に戻ってから校長らと一緒に撮影したものだった。

日本一の原動力となったのは、エースで4番で、さらに主将の嶋清一だった。

嶋の快投には、ただただ呆れ返るしかない。甲子園で5試合すべて完封。極めつけは準決勝、決勝と2試合連続ノーヒットノーランで優勝旗を手にした。

アメリカに渡っても大物らしさを発揮している松坂大輔が高校3年夏の決勝戦で、ノーヒットノーランを達成したことは記憶に新しいが、嶋は“世界のダイスケ”より上を行ったのだ。

当時のメンバーでは、センターを守った古角(こすみ)俊郎さんが今も那智勝浦で健在だ。最近取材に応じなくなったが、「5試合

で2本しかセンターには飛んでこなかった」と振り返り、嶋の投球のすごさを証言する。

甲子園5試合で許したヒットはわずか8本。外野には全部で12本しか飛ばなかった。これなら7、8人で守っても、当時の海草は優勝できたろう。

仲間の支え・監督の指導・本人のやる気で大投手にこの嶋を大成させたのが、長谷川監督だった。

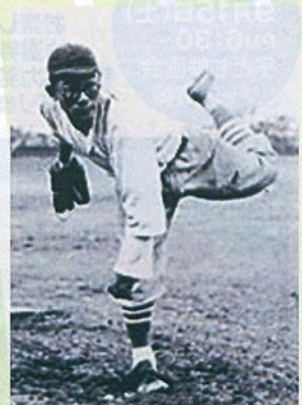
“甲子園史上最高の投手”と謳われた嶋だが、それまでは類まれな身体能力を持ちながら、精神的な弱さから自滅することがよくあった。大事な場面で四球を連発してゲームを壊しては、味方の応援団から猛烈なヤジを浴びた時期がある。

仲間の支えと本人のやる気、そして監督の指導のどれかひとつ欠けても、弱点の克服はできなかったらだろう。

長谷川監督の練習には、戦前のド根性主義の中にも、れっきとした理論があった。指導力の高さは、戦後に浪商や中京でも指揮を執り、1年だけだがプロの「大陽ロビンズ」で采配を揮ったことから伺い知れよう。

嶋への指導では、まず、投球フォームの完成に心血を注いだ。ピデオなど当然ない時代、ピッチングの途中で順次停止させ、その時点での理想の形を体で覚えこませ

速球は155キロ出ていた/1メートル落ちるドロップ 打撃でも超一流/100メートル11秒で走った “数々の嶋伝説”



甲子園史上最高の投手と称される海草・嶋の流れるような投球フォーム

た。コマ切れになった理想の形を連続させることで、いかなる場面でも狂わないフォームを作り上げたという。

「155キロは出ていた」「バッターがみんな腰砕けになった」「ドロップは、1メートルは落ちた」「打撃でも超一流だった」「中学に入った時には100メートルを11

秒で走った」。数々の嶋伝説には、努力を惜しまなかった天才の汗が垣間見える。

今もなおその雄姿は
地元の誇り

明治大学に進学してからも、嶋は神宮球場で活躍したが、1943(昭和18)年の学徒動員で海軍に入営し、戦場へと送られた。

これと前後して全国の学校で「敵性スポーツ」が禁じられ、名門・海草野球部といえど、活動停止を余儀なくされた。

廃部を機に刊行された野球部史『輝く球史』に、嶋の寄稿を見ることが出来る。

「海草野球魂をいついつ迄も守り続け、何れの日に生まれ代つ

た中等野球を、あの名残り尽きぬ懐かしいスタンドの一隅から眺める時が到来するであろう事を信じ、期待しつつ(後略)」

しかし、終戦5カ月前の1945年3月29日、輸送船護衛のため乗り込んだ海防艦がベトナムのカムラン湾で、米軍潜水艦からの魚雷攻撃を受け、南シナ海に消えた。生存者ゼロ。嶋の最期を知る者はおらず、墓には遺骨も納められていない。

「嶋が生きていたら、野球界の歴史は変わっていた」と、古角さんは断言する。

郷里の和歌山は2003年、有吉佐和子や南方熊楠らと共に、嶋を「和歌山市の偉人」として顕彰した。野球部のOBたちは「野球

の殿堂入り」を目指し、働きかけている。また、嶋が眠る寺の住職は「野球の成績もさることながら、お人柄も素晴らしかったとお聞きしています」と話した。

死後60年以上経つ今でも、嶋の雄姿は、地元の誇りなのだ。

「白球飛び交うところに平和あり」。高野連が戦後用いたスローガンである。

プロが69人、東京六大学だけで123人の選手が、先の大戦の犠牲となった。野球界全体の戦死者は、正確な数が分らないままだ。

この夏もまた、甲子園の季節がやって来る。鮮やかな芝、抜けるような青空。球音鳴り響く球場には、汗まみれの球児と平和が、よく似合う。

(新聞うずみ火記者・吉岡 雅史)

いぬみせいじのヨコシマ日記